

鳳 翻

鳳便山の地誌

防長二州を分ける中国山脈の一支脈の主峯である鳳便山は、東西の二峰があり、昔から現在にいたるまで、多くの人に愛されてきた。昭和六年発行の「趣味の山口」にはこの鳳便山について次のように書かれている。

「東鳳便山は、海拔七三四・二米で吉敷の中心より登るがよい。遠望する容姿が美しいので、秋冬の寒にかけて登山する者が多いが、眺望の佳なるはむしろ西鳳便山である。

西鳳便山は海拔七四一・八米で頂上の平坦地には岩石が露出している。吉敷畑から山道をとおり油峠を経て登るべく、眺望はすこぶるよい。登臨すれば山都は眼下にあり、周防の山々は波の起伏する如く西ははるかに周防灘をへだてて、伊豫豊後の山を望み、関門の地や干珠満珠の島も見える。北は阿武郡の山々をこして萩の古城下や波荒き日本海も望まれる。」

ところでこの鳳便山の名であるが、東鳳便山は、古くは「鳳嶽」と呼ばれていたらしい。(鳳土注進案)にもその語源は明らかでないが、山の形が飯などを煮してたくき具である飯に似ているのでこの名があるといわれている。実際、享保十三年の中尾村古図には「こしき山」とある。そして明治初年までは村の

人たちは「こしき嶽」と呼んでいたらしい。

昭和に入ってもその土地にすんでいた人はまだこのように呼んでいたという。いわゆる東鳳便山がこの名で呼ばれ始めてから、このようにまだ日が浅いのであるが、どうしてこのように名が変わったか、どうして東鳳便山という名前がついたかは、私にはわからない。

さて、ここでこの鳳便山を歌った短歌を二つ紹介しよう。

一つは、近藤清石の歌である。

この朝けむしれる飯と見ゆるかなこしきの嶽にふれる白雪

他の一つは、文久三年九月二十一日に、三条公が東久世四条の二廻と共に、土方南左衛門等を従え、この山に登った時の歌である。

鳳便の山をいかにと人とははかくとこたへむ言の葉もかな

また、東鳳便山の麓にある虹橋を歌った漢詩があるので、これも記しておこう。大内氏時代、支那との交通は開かれて、支那貿易を山口で管理していたほどであったから、支那の学者が、山口に足を印した者も少なくなかった。明の遺跡はしばらく山口に留っていたが彼が教えた山口十景の一つにこの虹橋があったのである。

虹橋跨水

盤受集三度東寺 變古尋仙真末
昔得雲虹飛欲主 沃地阿武最三州
最後に鳳便山の伝説を紹介しよう。この山

口の名山に關する伝説は三

鳳便山の黄金馬

傳黄いろい螢蝶殺の灯火
いてる室内、カチンカチ音が響いて、魔とも見える歌らばり一人一人鶴背のり下して居る。油煙と人いとに混濁した重苦しい空気が深い地底の金掘場であるした坑を穿ては空の様に黙して居る。其日は谷に「とら山へ入るのを忌む日である」と山登が崇をするとた。それなのに何故か坑夫如く金掘りに入ったのである。突然誰かの口から驚きの「あれ、あれ」と云う其の叫声

奥に当って一大奇蹟が現わる強い光線が重なり合った出でたと思ふ間に其の岩がれた。馬のようなもの、よい馬、黄金の馬であった。逃げ上ったが金の馬は唯愛しない。彼等はや々と安心して同時に腹の底からむくむく

た。黄金の馬、黄金の馬、こんな地獄みたいな坑内では必要はない。そして安楽

卷 頭 言

山というのは、我々にとって客観的実在として認められる山を指しているのであって、かかる客観的実在としての山と登山者とは本来切り離された、対立した存在である。このことは登山者の大部分がまだ都会生活者であることによって、いよいよその感が深い。都会における登山者は山仲間と山を語り、山の本や山の写真を見、山の道具の手入れをし、ときにビルディングの窓から山を遠望して長嘆息するであろう。けれどもこれらの行為はどれ一つとして登山ということはできない。登山とは登山者がまず山に近づき、実践的行為によって山に登ることではなければならない。この実践的行為の媒介によってはじめて、本来切り離された別々な存在としての山と登山者とが結ばれ、登山者はその対立的関係の束縛を脱して自由を得るのである。

目次

巻頭言

目次

会長挨拶

遭難の教訓

山小屋について一言

阿蘇山中にて

心のまま

二十周年記念行事に向けて

OB会規約について

近況報告

主将挨拶

次期主将抱負

昭和五十三年度

山口大学ワンダーフォーゲル部活動報告

新OB紹介

昭和五十三年度OB会会計報告

OB会会員住所録

編集後記

清水 秀子 12

寺園 光治 12

権藤 雅明 13

藤井 祝子 15

(M) 18

事務局 18

(M) 21

(M) 25

堺原 直毅 3

末国 弘司 4

岡田 耕治 6

大久保 彌生 7

秋山 高弘 7

前川 知徳 8

(M) 10

井上 実智夫 11

岡田 耕治 11

上田 功 12

白川 宣子 12

岩佐 玉枝 12

小野 雅文 12

会長あいさつ

O B 会会長

堺 原 直 毅

例年になく暖かい冬で春の感激に乏しい感がありますが、会員の諸氏に於かれましては御活躍の事と存じます。

年明け後、イランの革命、中越紛争に端を発し、経済状勢は石油危機の再来をうかがわれる様相で物不足、大幅インフレが憂慮されます。物質文明にとっぷりつかった生活態度を考え直す必要があるように思われます。

さて、昨年の総会で決議された創部二十年行事への取り組みを展開すべき年となりましたので、改めて会員諸氏の御協力を御願ひ致したく存じます。記念行事の性格付けも出来ていない状態ですので、当面今秋の総会に向けてのスケジュールを左記の通り考えたいと存じます。

一、記念行事についての希望募集（七月）

即、事務局の方へ連絡願ひます。

二、仮の準備会を発足させる。（七月）

① 準備会のメンバーの選定

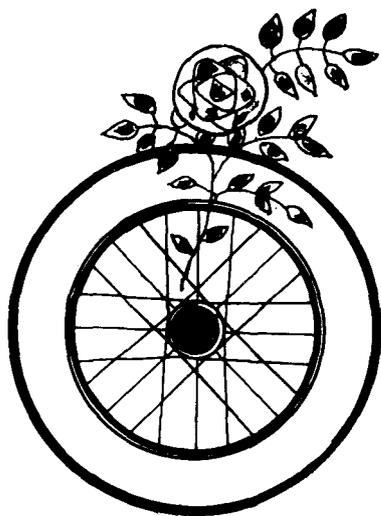
② 行事内容の検討、案作成

三、総会に原案の討議

（二〇月）

各年度の主将は同年度の会員の皆様への連絡、取りまとめ方、宜しく御願致したく存じます。それから、O B 会役員の任期を設定致したく、総会に提案すべく考えておりますので、お含み置き下さい。

記念行事を成功させることは会員の親睦、現役との結び付きを強めることになり、O B 会の発展に大きく寄与するものと信じます。重ねて協力を要請する次第です。



遭難の教訓

— 阿蘇からの報告 —

末 国 弘 司

今冬山シーズンに、という冬の阿蘇山が果たして「冬山」か、の論義があるがそれは稿を改めるとして、昨年末から今年一月末にかけて阿蘇山で三件七人の遭難が発生、死者三人負傷者四人を出した。例年にならない多さである。まず昨年十月三十一日、根子岳天狗岩の大下りから転落、重傷（二日後に救助）、次いで今年一月十五日に中岳南尾根で中学生五人が遭難し二人凍死三人重傷（翌日救助）、そして同二十日高岳鷲ヶ峯で転落死（翌二十一日夜遺体搬出）根子岳、高岳の遭難は一応経験者の事故だが、中学生の遭難は特異といえるケースだっただけに、大きな反響を呼んだ。いづれにしても、遭難はなんらかの教訓を含んでいるものだ。以下、簡単に経過をたどりながら、私の「独断と偏見」をもまじえて、考えてみたいと思う。

へ中岳南尾根遭難へ

遭難したのは、熊本市内の中学二年生、野球部とバスケットボール部員たちで「トレニングに山へ登ろう」と軽い気持ちだったようだ。うち数人が年末にも阿蘇山に登っていることから、阿蘇を目標にしたようだ。総勢七人。一番列車で熊本を出、宮地駅から歩いて仙酔峡へ。午前九時半すぎ、火口東側のロープウェイ駅で食事。そして食料を持たぬまま、火口縁から中岳を経て高岳へ。夏、好天ならハイヒールでも行けるようなルートだが、この日は積雪があっ

た。高岳山頂の月見小屋に着いたころ（正午ごろ）には霧が深くなり、吹雪模様になっていた。七人は往路を引き返した。しかし、七人は中岳から砂千里へ下る南尾根へ入っている。そして、うち二人が尾根先の下り口付近からまた引き返し、ロープウェイ駅に戻り、あとの五人を持っていたが来ないので最終バスで宮地駅に向かい、午後八時ごろ自宅に帰り着いた。そこで五人がまだ戻らぬことを知り、届け出となった。吹雪と、視界十m内外のガスのため道に迷ったのではないか、という。しかし中学生たちは多くを語りながらだが、遭難した五人は「草千里を通過して帰ろう」と話し合っていたようであり、それが中学生たちを二つに分けた原因、とも推察できる。そして、草千里をめざした五人は、はるか手前の砂千里への下り口で、本当に道に迷ったようだ。左にとるべきルートを右にとり、崖の上に出て進退極まったものと思える。岩穴をみつけ、体を寄せ合った。零下七・二度の夜半。七mから十mの北西風に吹きつけられては、無防備に近い五人には零下二〇度近くにも感じられたはず。未明、二人が倒れた。一人は眠るように、一人は半狂乱になって飛び出して、残る三人は夜明けにさまよい出たところを、熊本県警のヘリコプターに見え、救助された。一度から二度の凍傷ですんだのは、奇蹟ともいえるだろう。

中学生たちは、軽装、安易、と取りざたされた。たしかに、ジャンパー、ズツク靴、食料なし、ときては仕方ないだろう。しかし、彼らなりに「防寒対策」をしていたことに注目したい。トレニンググパンツの上にズボンを重ね、ジャンパーの下にセーターを着るなど。だが残念なことに、効果ある対策ではなかった。重ねたズボンはジーパンだし、ジャンパーも防風効果のあるものではない。一人

はチヨコレートを持っていたが、ついに出すことを忘れていた。眠らないように励まし合い、歌を歌うことは知っていても、汗をかけた木綿の肌着は捨てセーターを直接着込む知恵はなく、なによりもまして風を避けることをしなかった。

数えあげれば、きりが無い。適格なリーダーがいなかったことも大きな原因とみられている。

だが、ここで最も大切なのは、それらすべてが、大人たちの責任に回帰しないか、ということだ。中学生になるまで、自然の中で身を処するすべを教え伝え得なかった周囲の人たちにこそ。熊本県教委は、直ちに冬山禁止通達を出した。役人がするのは、こんなところだ。「自然教育をもっと積極的に行え」という指導がなぜ出来ないのか。役人が集まってつくっている「阿蘇山遭難事故防止対策協議会」も臨時委員会を開いたが、我々によって指摘された「文字の消えた道標」取りかえ、新設を決めただけ。より一歩踏み込んだ積極的な姿勢は、ない。これらはなにも、役人だけのことでなく、他人の子には無責任、自分の子は過保護、でありすぎはしないか。自然を愛する岳友として、我々だけでも、そうありたくはない、と願うのだが……。

へ根子岳遭難

大牟田市の、寺の息子。昨年春大学卒業して住職見習いのかたわら経営する保育園を手伝っていた。卒業後初めての山行という。学生時代はワンダーフォーゲル部に在籍し、リーダーも勤めている。ただし、岩の経験は浅い。根子岳西峰へ天狗岩縦走も初めてだったようだ。最後の詰め、天狗岩大下りを登る途中スリッパ、転落。負傷して沢を下方へ迷い、さらに二段の滝を落ちた。天狗岩頂上から

南側約二百m以下の地獄谷上部。額と足に重傷を負ったが、幸い夜間の冷え込みはまだ厳しくなく、二日後に救出された。

経験ある諸兄はわかると思うが、阿蘇の岩質は非常にもろい。穂高あたりを登るつもりでホールドをたどれば、まず転落する。それがために、過去幾多の犠牲者が出たことか。

この遭難者は、ザイルはもちろん三ツ道具も持っていなかった。単独登はんの、ビレイ方法を知っていたかどうか、あやしい。このことは、次の鷲ヶ峯遭難にも通じる。

へ高岳鷲ヶ峯遭難

ご存知の通り、鷲ヶ峯、特に北壁は「九州の谷川岳」と異名をとった、九州で最も死者が多いところだ。最近では傾山二ツ坊主、大崩山、行轅山、屋久島の沢と新旧とりまぜバリエーションルートが開発されたため鷲ヶ峯は古典ルートになり、住時ほどではない。だからといって、鷲ヶ峯の難易度が落ちた訳ではない。むしろ、残置ハーケンはずす使えぬところに、かえって落とし穴があるようにも思える。

遭難者は、北九州市の会社員、三十歳。山歴は四、五年くらいか。八代市出身もあってか、阿蘇にはかなり通っていたようだ。北壁直下、赤カベからGⅢに五十m余り、転落死しているのが翌二十一日福岡労山のパーティに発見された。当時赤カベは部分的に氷結していた。時刻は推定午後四時ごろ。下山中か、あるいは登はん中か、定かでない。天候はガスがかかり、時折晴れ間がみえる程度だった。遭難者は、アイゼンをつけ、三ツ道具とザイルを持っていた。が、ザイルを使った形跡はない。スリッパ、と思われる。面倒でも、ビレイをとってあれば、と思う。

× × ×

二件、いずれも単独行だった。単独行が大半の私にとっては、慣れの恐ろしさを、改めて思い起こさせた遭難であった、と感じる。

私自身が、遭難寸前の経験を持ち、また先輩が遭難死していることから、他人事ではなかったのかもしれない

(朝日新聞阿蘇通信局長)

山小屋について一言

岡 田 耕 治

小生の手許に、O B会の資料が有りましたので送付致します。O B会の規約等とつまらぬことばかり書いていますが、何しろ十年も昔のことですから、W・Vの骨董品として預かってもらえれば、それは幸せです。

時間が経っても、相も変わらず、同じ様なことをしているのかと想うと、阿呆らしくなります。

小生自身若いと想って、毎日、馬鹿な仕事に励んでいます。次の様な事実が、イヤ応無く有るのを覚え、愕然としています。

即ち、現役の皆さんがヨチヨチ歩きしていた頃、小生が、現役で、ホロホロ、山を歩いていたという事実です。

O B会の名は、Y B会と名称変更したら、こうした愕然を覚えなくとも済むかもしれません。

閑話休題

山小屋建設、大いに結構

ドンドン金を集めて、別荘並の、芸者さんが沢山居る豪快な山小屋を建てる様にして下さい。

同封の資料の中にも有りますが、小生、昔日に山小屋建設資金を集めたことが有りますが、同時期にY U W Vの部室が全焼し、山小屋建設資金が、部品購入に廻った様です。

何はともあれ、資金集めが、最大のポトルネックになることは想像されます。

少々の金を、商店街のオッサン連中から集めたり、体育会にせびったり、O B会にお願いしても資金は絶対的に不足するのではないのでしょうか。

建設場所等については、最もらしい、金として、県、国、市、等々にお願ひすれば、大義名分に負けて許して下さると想うけど。

学生様でしか出きない様な突拍子もないアイデアでやってみるのが面白い。

マスコミに取入って、悲劇の嘆願をしたり、駅前で、赤い羽根募金の真似をしたり、色々ふざけたことやっていると集るかもしれないね。小生には、どれ位の資金計画をしているのか解らぬので、何とも言えないけれど……。

資金の応募によって、攻撃方法は必ずあると想う。集めるのはしんどいけど、集まってくると面白い。その中の一部を建設委員会の名目で飲み食い等したら、最高ダロウけど、批難を浴びるので……。等々つまらぬことになってしまるのが小生の性格。アンカラズ。

阿蘇山中にて

大久保 弥生

ここに来て、丸三年が過ぎた。本当にあつという間だった。ここに赴任する前は、峠をおりた所の町にある小さな小学校で、山口から帰ってすぐ決まった時は、「行かない〜」と親をずいぶん手こずらせたものだ。それが、今は、もっと遠い所のへき地に来て、何とか楽しくすごしているのだから、慣れつてふしぎだなあと思う。

三年といつても、仕事は実際は二年位しか行っていない。なぜかというと、三年の間に、子供がどういう訳か、二人も生まれて、その度に育児休暇（無給）をとっているからだ。子ども（学校の）や父兄には、迷惑のかけっぱなしである。

無給になって、収入が一ぺんに半減したわけだけれど、何とかやれると、ホイホイで使っていたら、さて困ってしまった。給料日まであと十日もあるのに、財布の中は、四、五百円しか入っていない。全くこんなことではいけないが、誰でもやっていることなのに、私にはなぜできないのだろうか。もっと経済しなくては。四月から、又、働くつもりだが、これにこりて、もっと貯金しよう。

ここもずっと寒かったが、近頃少し暖かくなった。五月の下旬頃になると、ババが山からこいできたエビネランが、三百本ほど色と

りどりの可れんな花を咲かせる。そうすると、東竹原にも、やっと春がおとずれる。

「心のまま」

秋 山 高 弘

働き始めて、初めて親の（特に親父）の苦勞、有難さを知ったと言つてよく、つくづく学生時代がなつかしく思い出される。大都會で時間に追いまくられてあくせく働いている為か、山口でののかさ、自然のふところに抱かれた生活にあこがれに似た気持ちすら感ずる今の自分である。

昨年の今頃、自分はいったい何をしていただろうと考えてみた。卒論を出し終わって、何もすることがなくなってしまった時、かねてから温泉にのんびりつかりたいと考えた私は、俵山温泉に出掛けたものだった。自炊宿に泊まって、本を読むか温泉につかるかの毎日だった。かなりぶ厚い本を一冊読破し、心身共に満ちたりた気持ちで帰って来たのを思い出す。

後日このことをある先輩に手紙で報告したところ、「うらやましいといつかかなんというか、今の俺がどんな気持ちでこれを読んだかおそらく秋山にはわかるまい」という返事が返って来た。

しかし、しかしである。遂に自分も今やその気持ちがわかる様な境遇となつてしまった。よくわかる。いや本当によくわかるなんて、目はうつろにため息をついている毎日なのである。

話は変わるが、最近よく一人で山へ行く。仕事も徐々に覚え始め、慣れてきたせいであるが、やはり都会でのゴミゴミした生活が自然を求めさせるのであろうか。それはそれとして、その行く回数がかえって学生時代より多いのはいったいどういうことなのだろう。

結局、都会の人工的生活に対する反動があまりにも強いということに自分の場合落ち付くのだろうか、そうやって考えてみると、案外ワンダーフォーゲル部なんでもも都会の大学の方がよく活動しているのかもしれない。山口なんて所は、あまりにも自然環境が良すぎて、それが反面自然の中へ飛び込んでゆこうとする気持ちを減退させているのではないだろうか。

山へ行くという事でもう一つ考えることは、今のこの山行が自分にとっての本当の意味でのワンゲル活動ではないかと言うことだ。(日帰りでも鳳瀬山程度の低山なので登山と言うよりはハイキングとでも言った方が良いのかも知れぬが)

学生時代、「あるきの記」に、人夫々異なったワンゲル観を持っている。結局今のクラブではそれらを実践しようとするのではなく、実践できるだけの力量を養う場になっていないかと書いたことがある。

では、その養ってきた力量なり経験なりは、他の人間のワンゲル観との相異、クラブという組織に居るが故の犠牲、そういったものが全く無くなった今こそ、自ら発輝されるはずであり、その環境の中で自らの意志でやっている活動をその人にとっての真のワンゲル活動と言つてよいのではないか。

諸兄の中には、生活(たとえば家族)や、職業から来る制約故に、とてもじゃないが真のワンゲル活動なんか出来るものかと考えてお

られる方も多いかと思う。

だが私はそれが理想のワンデリングと言っているのではない。人間、学生なんていう身分は特殊なものであって、本来職業、生活を持ちそれからの制約があるのは当然であるという見方からすれば、そう言った制約の中で自ら行なう(行なえる)活動こそ、真の活動であるのではないかと考えるのだ。

さて、最近「マイナーエクスタシー」という言葉を知った。マイナー小さな、エクスタシー＝興奮、喜び、つまりほんのささいなことと喜びを感じる事であるのだが、そういう事が今の自分にはきわめて少なくなっている様でさびしい。登山やその他のものを通じて、積極的にマイナーエクスタシーを求め、ひいては精神的に豊かな生活がおくれたらと近頃思う。

どうも話があちこちとんでひどい文となってしまうたが、標題のごとく書き留めたものであり、御容赦願いたい。

二十周年記念行事に向けて

— 山小屋について —

前川 知徳

先のOB総会、OB通信にてお知らせ致しました様に、現役段階では創部二十周年行事として山小屋建設を計画しています。御存知の様に山ワンダーラーにとって山小屋建設は長年の夢でした。今まで何度か企画されては消えて、いつしか忘れ去られていました。しかし、登山家にとって山小屋は本当にありがたい施設です。我々も

合宿で使用し、その恩恵を何度か経験しました。アルプスの立派な山小屋で、春山の簡素だが、さっぱりとした避難小屋でと本当に助けられたものでした。

我々の山小屋建設の発想もその恩恵から出発しています。その性格は自然とのふれあいを歌い、その建設目的として次の三点を掲げました。(一)ワンダーフォーゲル精神の高揚と発展、(二)自然保護推進、(三)現役とOBのバイブ的役目を持たせ、両者の交流を深める。の三点です。第一点はワンゲル活動をより一層拡大発展させる可能性を持っています。山小屋生活の修得、沢登り、オリエンテーリング、そして冬には雪上訓練、山スキーと枚挙のいとまありません。多くなる部員、ワンゲル活動の多様化が予想される今日、その要求を山小屋は允してくれるのではないのでしょうか。又、第二点でも清掃登山やワンゲルの一面的要素である文化的活動が可能となってくるでしょう。第三点は山小屋建設をもって創部二十周年記念行事とする最大の理由です。現在、学年間のつながり、地域的交流で支えられているOB会をより一層、幅広く現役をも含めた行事は山小屋建設が最適ではないでしょうか。OBは資金面や書類作成のアドバイスで、現役は労力で建設にたずさわる。OB・現役の一人一人が何らかの面で山小屋建設に関係することが可能だからです。

ワンゲル発展の可能性も多いかわりに、問題点も少なくありません。何分、大仕事ですのでOBの資金面での負担、現役の労力、時間の負担も大きなものとなるでしょう。その他、未知の行事ですの問題は山積することでしょう。しかし、前述した様に山小屋建設は我々のロマンでもあります。いつか誰かが実現することでしょう。今はその良い時期です。現役諸君も積極的に取り組もうとしています。

す。OB会も古谷氏、秋山氏の御努力により、しっかりとしたものとなりました。その上、山小屋建設はOB会を一層充実したものにすのではないのでしょうか。御一考して下さいれば幸いです。

最後に現役段階での活動をお知らせします。

五十二年、七月 学生課との交渉で山小屋建設の話が出る

五十三年、六月 部会にて山小屋建設承認。建設準備委員会発

足

同月 第一回準備委員会。候補地選び(鳳翻山、十

種ヶ峰、羅漢山、寂地山、大山等)

九月 対外調査、(一橋大、立命館、広島大より資

料)

十一月 第二回準備委員会。第一候補地に羅漢山を決

定。

十二月 羅漢山調査。地元でも賛意を得る。

五十四年 一月 部会で再確認

二月 第三回準備委員会。新委員決定。新委員会発

足。工学部と合同で建設することを内定。



OB会規約について

山口大学ワンダーフォーゲル部

OB会規約

第一章 名 称

当会は山口大学ワンダーフォーゲル部OB会（仮称）と称す。事務所は山口大学ワンダーフォーゲル部に置き、将来地域別の支部を設置する。その際支部名及び役員を定める。

第二章 目 的

当会は会員相互間の親睦と交流をはかり、併せて山口大学ワンダーフォーゲル部の発展を助力するために後輩の指導援助を行うことを目的とする。

第三章 組 織

一、 会員資格は卒業時、部に在籍せし者は自動的にその資格を得る。

二、 当会は右各会員より構成され、会運営の責任者として会長一名、幹事若干名を置く。

三、 会長は当会の総会にて会員の絶対多数によって承認、決定される。任期は一年とし再任は妨げない。支障のある場合は幹事がこれを代行する。

四、 会長は当会を代表して山口大学ワンダーフォーゲル部との連絡を行い、当会目的達成のため努力し会員に対して責任を有する。

第四章 活 動

一、 会長は原則として隔年ごとに総会を招集する。

二、 特別な行事を行う場合、会長は会員の承認を得ねばならない。

三、 会員は、その動静を明確にし、会員相互、後輩との連絡を緊密にすること。そのために移動その他の際速やかに連絡すること。

四、 会員は、後輩の指導助言を行うことができ、又その義務を有する。

五、 会員は、部の行事に部の承認を得て参加することができる。

六、 毎年一回会員名簿を作成すること。

第五章 会 計

一、 当会は、会計を設け、その資金は入会金及び会員有志の自発的拠出による。

二、 入会金は、二千円とし入会初年度に納入する。

三、 毎年一回会計報告を行う。

四、 当会の会計事務一切は、部に委任することができる。

第六章 細 目（支出について）

一、 部の判断で支出できるもの

会員への連絡のための通信費、事務用品費。

二、 会員の承認を必要とするもの

前項以外の支出でその手続きは、会長に一任する。

この規約を見るのは初めての人が多いのではないだろうか。この規約は昭和四十三年十二月、当時の会長深川勝人氏を中心に発効されたものです。今まで日に当たらず埋もれていたのを今度、岡田耕治氏の御協力により明らかになったものです。

このOB会規約を見ますと現状と違った点が多く存ります。その相違点を掲げてみますと、(一)会運営の責任者は会長と幹事若干名となっている点、(二)そして、会長の活動は現在、事務局長(学生)が代行している点、(三)入会金が二千元(現状は千円)となつている点、(四)この規約ではOB会報、OB通信に関してはふれていない等々です。

相当以前の案なので現状とはそぐわないのは当然でありましょう。しかし、その基本の精神、主旨は変わっていないと思います。ワングルの発展に伴いOB会も発展、充実してきました。特に古谷氏、秋山氏の御努力により、OB会の型が整つてきた現在、最も望まされるのは、明確なOB会規約ではないでしょうか。

近況報告

今年の夏合宿は九州脊梁山脈の国見岳・向坂山を三泊四日の日程で内大臣岐側から入山した。取りついた国見岳が大きすぎ、何と下山に二泊を費してしまい、計画半分で終わった。地図にあったカギノ手歩道を下山に使う予定であったが、途中から廃道となつていて三時間ロスしてしまった。この為、門割林道に戻り、これをたどつていく事になり、高度を仲々支払えなくなり下山に二日費すことになつてしまった。途中、トラックでバス停のある町まで便乗でき運がよかった。この町の尾前小学校の講堂に泊めてもらう事になった。宿泊ノートに記入する時、九州各大学のWV部の名前が連ねてあつ

たが、中になんと山口大学ワンダーフオーゲル部の名前を見出し、「あっ、頑張っているな。」と懐しく、うれしく、誇らしく思いました。生徒も一緒によるこんでくれました。

当方はまだ、高校WV部の雇問をしていますので現役で頑張っています。「防長百山」の中から気に入つた山を登ることにはしているのは、後塵を拝する気もしないではないが、故郷の山をいつくしむ人々の仲間に入り楽しむことも悪くはない。この秋と冬の山行は花尾山と雁飛山、春休みは一位・天井ヶ岳と計画している。またどこかで活躍している現役縮君に会うかも知れないですね。

夏合宿一ヶ月時に、肋間筋神経痛に陥り、顧問引退を考えたのですが、運よく再起できました。鉛筆登山専門にならないようにと思つていますが、体力は確かに年令とともに衰えます。皆さん、御注意あれ！

井上 美智夫 (四六年度卒)

昨年四月二二日、大阪近辺のOBが拙宅に集まり、旧交を暖めました。集まつたのは、北崎勝征、津森正志、田丸真司、山本信義、箱田貴代子の各氏と私共二人、計七名でした。昔と変わりないところ、変わったところと様々ですが、懐しいひと時でした。今後時々会おうと話合いました。

岡田 耕治 (四二年度卒)

私事で恐縮ですが、我家の幸福をお知らせします。実は八月二三日に初めての子が生まれました。末は竹下景子風の美人になるであろうかわいい女の赤ちゃんです。

私の家から富士山が見えるのですが、無精に山に登りたくて、たまらなくなります。まだまだ体力には自信があるので、ワングルのトレーニングに出てみたいなど思っています。どうぞみなさんによるしく。相変わらずの古賀ちゃんです。

白川 宣子 (五十年度卒)

就職して早や半年。生きている子供相手だから、面くらうような事態に今だもって出くわします。学級運営に悩んだり、担当教科に行き詰まった時など遠く山口の地に思いを馳せます。何と囲りの人に甘え、そして支えてもらってたことかと懐しく思い出しております。

清水 委子 (五二年度卒)

現在、中学生を相手に毎日頑張っております。放課後は、学校對抗試合の練習でバレーボールに汗を流しています。ふと大学の頃を懐しく思い出すこともしばしばです。

岩佐 玉枝 (五二年度卒)

銀行はしんどいですわ。特に月末などはメシを食う時間もないほどで、今日など(九月三〇日土曜日)終わったのは八時を過ぎてましたから(本当のところは、月末事務だけでなく、金が足りず捜しまわっておこった故)。あまり給料もよくないし、毎日客相手というのも疲れるし、まあ例の調子で頑張っております。

(注) 事務局に来たハガキの中から抜粋させていただきました。

主 将 挨拶

寺 園 光 治

一月二月の暖かな陽気に、このまま春を迎えるのではないかと思っていたところ、三月に入り強力なシベリア寒気団の訪れで、やっとな冬らしい気候となりました。その為、甘い香を漂わせていた香山園の梅の花も白い綿帽子を被り、心無しか枝を震わせているような気がします。天候の変り易い毎日ですが、OBの皆様はお変わりございませんか。

我々第一八期執行部の活動も、春合宿を残すのみとなりました。この一年間を振り返ってみますに、まず山行中に大きな事故や怪我人も無く、そしてザック病を訴える者も無しに無事次期執行部、主将にバトンタッチ出来る事が何よりの喜びであります。今年度のクラブの特色としては、執行部方針として「文化ワンを取り入れた幅広いワンデリング活動」を目指した点にあります。この文化ワンに対しては、当初下級生の中に相当な戸惑いがあり、又毎日の部活動等の為に進行が遅くなってしまいましたが、現在レポート作成等の仕上の活動に入っています。グループ別の活動内容としては、西表島を中心とした八重山群島の自然等の調査。山口―萩間の旧街道の調査や、山口の史跡・人物の研究を通しての山口再発見。そして、現在工事進行中の錦鶏ダム建設による自然破

壞等々、取り上げたテーマも多様であります。最初から批判的な者も居りましたが、クラブ員の多様化する方向性の充足、クラブ発展の爲の一布石としての役割は、十分はたし得たと自負しております。個々の活動内容は活動報告に示しました通りですが、昨年以上の部員増加で七〇余名の部員を抱える為には部員の把握・活動の多様化・内容の充実が增々困難となつて来ました。我々執行部としましては、先輩方の残された伝統を守り、前期執行部の活動を引き継ぎ、そして右に示しましたように文化ワンを取り入れて頑張つて来ました。しかし、まだまだ不十分な点も有り、次期執行部の活躍を期待したいと思ひます。

我々三年も四月からは役員を離れ、自由な立場になります。しかし、部を離れてしまふ訳ではなく、三年間に得た知識・経験を生かし、後輩の指導に、又共に活動をして行こうと思ひます。四月からは前川氏からOB会事務局長を受け継ぐことになりました。OB間の、又現役とOBとの連絡・親睦等に頑張る所存ですので、よろしく御指導お願いします。そして二〇周年記念の山小屋建設も、何とか今年中に日処をつけ、建設段階迄持つて行きたいと思ひます。次期執行部と我々四年が中心となつて頑張る所存ではあります。自分にも学生の事ではありますので、OBの皆様方の御協力、御援助をお願いすることもあると思ひますので、よろしくお願いいたします。



新 主 将 抱 負

OBの諸先輩方々におかれましては、ますます御健康で御活躍中のことと存じます。

さて、去る一月二十八日に来季の新執行部並びに新役員・係が決定致しましたので御報告申し上げます。

役 員

主将 榎 藤 雅 明 (経二)
 副将 武 田 健 治 (")
 渉外 里 内 繁 (")
 会計 佐 藤 年 伸 (")
 係
 トレーナー (m) 松 永 裕 之 (経二)
 サブ (f) 新 川 美 智 子 (教二)
 サブ (m) 堀 剛 (経二)
 サブ (f) 原 宏 子 (教二)
 装備 大 家 京 三 (経二)
 サブ " 中 野 博 志 (経二)
 食当 市 川 宏 司 (獣二)
 医療 伊 藤 節 (経二)
 気象 豊 永 孝 二 (経二)

榎 藤 雅 明

吉 国 香 (文二)
木 本 英 俊 (経二)

新執行部は、左記の役員・係の二年生に、川原田健策(経二)、西村伊都子(文二)の兩名を加えた一三名で構成いたします。未熟者ばかりですが、全力を尽くしてがんばるつもりです。

そこで、来季に向けての抱負ですが、現在の部の状況を振り返ってみますと、部員数がかつてないほど増加し、今季の夏合宿参加者は実に六〇名を超える程でした。来季も、これ以上の増加が予想されますので、今まで以上に日常のトレーニング等の活動の充実をはかって、個人個人の部員のレベル低下を防ぐと共に、部の把握に務めてゆきたいと思えます。

次に、我々新執行部の方針について述べますと、我々の方針は「巾広いワンデリングをめざす」と「県内合ワンの成功」ということです。前者については、部員数の増加につれてそれだけ、いろいろなワンゲル観をもつ部員が出てきました。冬山や沢などの高度な山行技術を要するものや、文化ワンのデスク・ワーク中心となっていくようなものまで様々です。ワンゲル部としては、それらの活動を行う上でいろいろな制約を加えねばならないでしょうが、我々執行部としては、日常活動や夏合宿を通しての基礎的技術の徹底や、いろいろな知識の普及を通じて各部員にそれなりのワンゲル観を持つてもらいたいと思っており、我々が行っていくのは、あくまでも基礎的技術修得の徹底と広範な知識普及です。それが、各部員の向上ひいては、ワンゲル部の発展につながると思います。後者については、来季の県内合ワンを山大本部と山口女子大とで主管することにいたしましたので、山口県下のワングラーの一大イベントであるこの

合ワンをぜひとも成功させ、地域親ボクを深めてゆきたいと思えます。実行委員長の遠藤孝君(経二)を中心に順調に準備は進んでいます。

また、さらにOB会二十周年の記念行事である山小屋の建設の件に関しましても、本格的に本部・工学部合同の準備委員会を設立して、一日も早く施工段階へ進みたいと思っています。

我々は、諸先輩方が残され、造り上げられてきた山口大学ワンダーフォーゲル部の伝統に新しいページを加えるために、今までになく大規模化した部を、今まで以上の厳しさでまとめ、はじめのある部を造らねばならないと痛感しております。今、我々は自らに与えられた責任の重さをひしひしと感じながらも、来季に向けて心を新たにしています。今、我々は、燃えているのです。

最後に、OBの皆様方のますますの御健康と御発展を祈っております。

二月二十八日 新主将 権 藤 雅 明



昭和 53 年度 山口大学ワンダーフォーゲル部活動報告

月 行 事

- 4 ワンゲル説明会 於教育11番。部長よりワンダーフォーゲルとは何か。又その活動内容を説明、執行部員も自己紹介を兼ねて係別にその内容を多角的に説明する。後、学年別に個々の紹介と共にワンゲルをアピールする去年と同様S49年度春合宿(屋久島)番15回中四合ワン(山大主管)のフィルム上映は好評であった。説明会を2回やった成果も大きい。約30人入部、内メツチエン8人。
- 公開ハイキング 新入生を対象として一般募集し、ハイキングを通じて自然に親しむと共にワンゲルの楽しさを味わってもらう。新入部員勧誘の手段とする。今年度は天気に恵まれ各パーティー別に亀山公園に集まり、ゲーム・ソングをし、鴻之峰にて昼のエツセン。皆で同じ釜の飯を食べる。
- 新入生歓迎登山 東鳳翻山へ1泊2日の山行。新入部員が少なく24人。自然のすばらしさを共に感じ山の生活に慣れさせる。県内合ワンを当面の目標とし、最低限の山行技術を指導。
- 5 県内合ワン 於鬼ヶ城。下関市大・梅光短大主管。参加校、下関市大。梅光短大。宇部短大。宇部工専。徳山大。山大(本)(工)。山女大。
- 80km耐久徒歩 萩一宇部。山大工学部主管。一般を含めて300人余り参加。部員全員完歩。今年は1年オツチエンが頑張りに最上位を占める。
- リーダー養成 2年生2名に対し上級生(3、4年)がついて読図、及びビバーク訓練。於山口・平川近郊の山。
- 6 錬 成 2回の錬成は他のクラブに誇れるワンゲルの名物であり、夏合宿参加への必要条件である。
- 今年はザック病における支障をできる限り避けようと、新たにトレーニング中予備錬成を行なう。(ザックの重さ15kg前後。)
- 砂を入れた定量以上の重いザックをかつぐことにより、自己の体力の限界に挑戦し、又精神力を養うと共にその中からパーティーシップを作り出す。
- 2回に分けて行なわれ1回目はPLとして立った3年生のコース・日程・人数を考慮に入れて1・2年生はパーティーに入る。2回目は決定された夏合宿のパーメンでコース、重さなどを決めて行なう。
- 今年は予備錬成の成果があつてか故障者がでなかった。
- 7 パーワン 夏合宿に向けてパーティーシップの強化を目的とする。1泊2日の山行が中心となるがパーティーによっては海に行くこともある。
- 今年はその行動領域が様々であった。
- ブレ合宿 全パーティーの山城が北海道となつた為現地の海の見える小樽商科大学、智明寮にて2泊3日で最終調整を行なう。運動場・裏山で、トレーニング、エ

ツセン買出しなどこの期間中に行ない又最新の熊情報をキャッチする。

- 7 夏 合 宿 利尻島、大雪山系、1 パーティー
～ 十勝、大雪山縦走 2 パーティー
8 大雪、ニベソツ、石狩 1 パーティー
石狩、十勝山系 1 パーティー（混成）
石狩、大雪山系 1 パーティー
大雪山系 1 パーティー
知 床 1 パーティー
本部（オッチェン3名のみ） 1 パーティー

北海道足寄町オンネトー

本部を除き、8 パーティーには初めての山域であり、熊による事故の心配など多々あったが、全パーティーコース消化のもとに無事集中した。神秘的なオンネトーの夜空をファイヤーでこがし、オンネトー湖でたっぷり水浴びをした後、北海道名物のじやが芋、絞りたての牛乳、とうもろこしに舌鼓をうった。アルプスとは姿を異にする緑深き山々はすばらしかった。

10. 公開 キャンプ 一般募集で山大生にキャンプ生活、山登りの楽しさを教える。しかし、翌朝より生憎の雨で鳳凰山に登らず解散。
11. 中 西 合 ワ ン 鳥取大学主管のもと伯耆の空にそびえたつ大山のもとに中四ワンドラマーが集う。雪の関係で今年は上旬に開かれた。
12. 学長杯駅伝マラ この大会に備えて、毎日ジョッキングから初まり8～9 km走りこむ、足の故障者が続出したが、各々の記録の進展はめざましかった。
男子6 チーム。女子1 チームエントリー。運動男子の部でオッチェンはおしくも3 位。去年にも増して好成績を残し賞品の数も多かった。

尚、大丸（文3）入屋（経2）の2 人が区間賞。

ワングル杯マラ 本部ワングル主催。今年は、宇部短、山女の顔ぶれがなく。内わだけの本部
ソ ン 大 会 工学部の勇士たちが奮闘。

男子 大丸（文3） 女子 壇上（理1）が優勝

忘年ワンデリング 於東鳳凰山。「本当に登るのだろうか？」とさすがのワンドラマーもたじろぐほどの風雨雷の天候。しかし、夜にはおさまりきらめく星の下で、静かなにぎやかなクリスマスソングを迎える。今年はいつになく静かな忘ワんであったようだ、四年生との最後の山行であった。

1 卒 部 式 追出しコンパ

於太陽堂。故桑野氏も含め卒部生10名、東京大阪神戸福岡九州からの日の為に駆けつけて下さった多くのOBの方々や今や大所帯の後輩に囲まれて四年生にとって最良の日、話に花が咲きお酒の方もずい分美味だったようです。

しかし、宇部短大や山女の方々の声がきかれなかったのがちよっぴり寂しかったような・・・。

春合宿錬成 男岳、鳳凰山、ダツヤ山にて。何事もハズニングなく無事終了。

2 雪上訓練 十種ヶ峰(ラツセル、わかん歩行訓練など)、我々を歓迎してか暖冬の中この日は突如として積雪、あるパーティーは喜こんでビバーク訓練をし又雪と戯れていた。

3 スキー合宿計画 暖冬の為、積雪がなく急きよ中止

春合宿

屋久島 2パーティー(混成1)

剣山 1パーティー

大崩租母嶺 1パーティー

背梁 1パーティー

西表島 2パーティー(混成1)

姫島 1パーティー

その他の活動 ① 講習会

新人の入部後、5月、夏合宿前6月、その他(みずた山の店、日赤病院にて衛生関係)必要に応じて講習会が開かれる。

部員全体を対象とするものから希望者を対象とするもの、合宿の同じ係を対象とするものなど様々でクラブ全体における係の担当者が中心となる。内容は、エツセン(今年は合宿のエツセンのカロリーを提出)気象(特に北海道の気象を中心に)衛生(ブヨ、カの予防)装備、遭難対策(特にヒクマにおける安全対策の徹底)など様々な分野に渡る。

② 安全対策委員会

昨年度より引き続き上級生5名で設置、主な活動は①安全対策に関する諸事項を検討し、執行部に対して要請勧告を行なう。②山行計画の安全調査、承認など、山行計画(特にフリーワンなど)における綿密な検討、安全チェックの強化を目的としている。

③ 文化ワンデリングへ第1歩(今年度執行部方針)

ワンダーフォーゲル活動の1つの要素である文化ワンを少し見つめ直す機会を今年つくりました。3年をPLとして部員を振り分け各パーティー毎にその取り組み方を決めました。まず、文化ワンとは何なのか(・・・我々が真のワンゲル活動を進めていく上でやはり避けられない疑問だと思います。)からその活動が始まりました。正しい答などなく永久の課題であり、暗中模索の状態ではありましたが、今年はずまず初段階として、文化ワンへの意識づけ、ワンダーフォーゲル活動の本質を探る1つのきっかけになったのではないかと思います。

新 O B 紹介

— よろしくお願ひします —

- ① プロフィール ② 学 部 ③ 勤 務 先 ④ 出 身 校

足 立 俊 治

- ① ワンゲルの伊達男、大きな事はいい事が主義で南ア全山縦走、英国遊学を行う。
② 経済学部 経営 赤石ゼミ
③ いすず金融販売 ④ 岩国高（山口）

安 藤 哲 也

- ① アレ、OB?でも事実、この神秘性が彼の個性。でも法律の番人とは又不思議。
② 農学部 農芸化学科
③ 大分法務局 ④ 大分上野ヶ丘高（大分）

梶 村 久 美

- ① ワンゲルの知力を証明した女性。大学院をふって女子高の先生に。神戸でもジーンズ姿を続けるのでしょうか。
② 農学部 農学科
③ 甲子園学院高教員 ④ 鳥取西高（鳥取）

桑 江 保 子

- ① ワンゲルの女親分も今後は出版界で活躍。ワンゲルから女流作家が誕生するかも。
② 文理学部 西洋史専攻
③ ホルプ出版K・K ④ 筑紫女学園高（福岡）

徳 奈 賀 忍

- ① 彼女の卒業は山口を寂しくさせる。今後はキャリアウーマンとして活躍。本当は受付け嬢兼お茶くみだったりして。ゴメン
② 教育学部 中学校英語
③ タクシンK・K ④ 光高（山口）

八 谷 孝 徳

- ① こよなく人と田舎を愛する男。山口県の高教員に決まり「ゆうひヶ丘の総理大臣」を目指す。彼の元から何人マラソンランナーが出る事やら。
② 文理学部 倫理哲学専攻
③ 高校教員 ④ 神埼高（佐賀）

浜 野 宏

- ① ワンゲル有数の山岳批評家の彼も今後は医薬産業界で活躍。現在、彼の周囲に春が来たとのうわさ有り。
② 文理学部 化学専攻
③ 日本レタリーK・K ④ 基町高（広島）

深 田 明

- ① 学問にスポーツにと幅広い活躍。今年度卒業生代表として答辞を読む榮譽。リッパ。
- ②文理学部 数学専攻
- ③日本事務機K・K
- ④筑紫ヶ丘高（福岡）

前 川 知 徳

- ①この1年東滝山荘で隠居生活。一層しぶ味が出たとの声しきり。
- ②経済学部 経済 貞木ゼミ
- ③住友生命
- ④観音寺第一高（香川）

村 田 英 子

- ①白いチェリーで山口をサツソウと走る姿は本当にさくらんぼちゃん。下関の小学校教員に決まり、ホット一息。
- ②教育学部 幼稚園
- ③小学校教員
- ④山口中央高（山口）



昭和53年度 O B 会 会 計 報 告

S 5 3. 3 ~ S 5 4. 3

収 入 の 部		支 出 の 部	
前年度繰越し金	5 8, 3 7 0	O B 会報第2号	4 9, 8 2 0
O B 会費	5 8, 6 9 5	O B 通信第1号	
(S 5 4. 3 まで)		印刷代	
O B 総会残金	3, 0 0 0	郵送料	
		その他	
		O B 通信 (2 ~ 6 号)	3 7, 2 2 2
		連絡事務費	
		紙 代	
		郵送料	
		印刷代	
		その他	
	1 2 0, 0 6 5		8 7, 0 4 2

残 金 3 3. 0 2 3

※ この時点ではこのO B 会報第3号の代金は支払われておりません。
以上報告致します。

※ 来年度O B 会費納入についてのお願い

昭和51年度末のO B 総会において、O B 会費は年間1,000円とすることが決定され、昭和53年度からは正常に徴収してまいります。このままですと会費値上げか会報発行の中止になりかねませんのでよろしくお願い致します。

- 今まで会費未納の方 3,000円
- 54年度会費 1,000円
- 口座番号 下関 16050 山口大学ワンダーフォーゲル部

編集後記

二月中に完成させたかったのですが、原稿の集まり具合、私の怠慢のため遅くなってしまいました。

会報第三号もOB諸氏と現役諸氏の御協力により無事発刊することが出来ました。内容も前々号、前号とは違った面が出ています。各地の報告、近況の他にOB会の今後への意見、特に末国氏の報告や岡田氏の意見など建設的な面が注目されます。OB会の進歩の表れではないでしょうか。

来年度もより内容の濃い、バラエティに富んだ感想、アイデア、意見などを次期事務局長の寺園君までお寄せ下されば、来年度もより充実した会報となるのではないのでしょうか。よろしくお願い申し上げます。



編集 前川 知徳

発行 山口大学ワンダーフォーゲル部OB会

住所 〒753 山口市水の上町3の5 小田方

※ 来年度も事務所住所はこのままです。